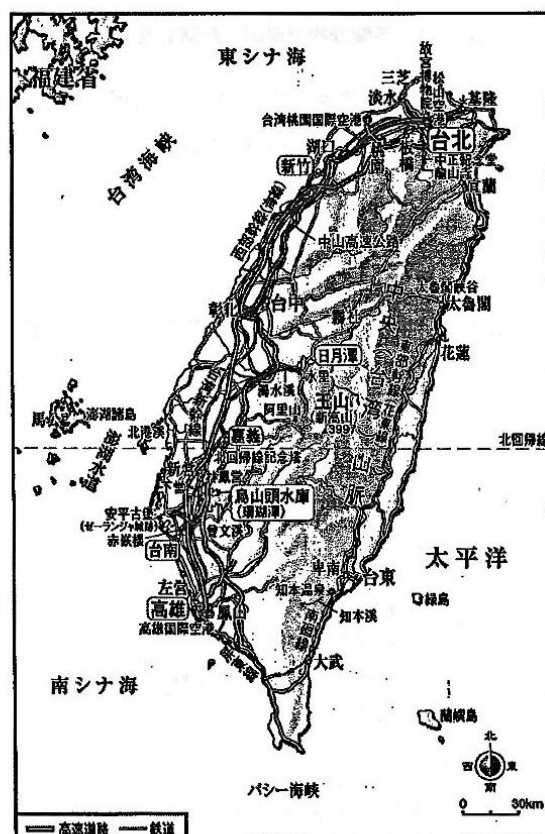


気付いて見ると八田さんの事蹟には古川勝三さんほかの幾つかの文献があり*、自分なりにまとめる過程で、時代背景、台湾領有前後のことに関心を持ちました。明治の日本近代化の過程での先人のご苦心が、身に沁みて判って来たのです。これに触れるすね。

今回の大震災に台湾から異例とも言える義捐(物資560トン、現金250億円)が寄せられた事を、国際政治力学を超えた「本島人の誠意」と受け止めるべきです。明治28年領有以来50年の先人がたの努力と、これをプラス思考で受止めて呉れた台湾の有識者の心意気が、今日の台湾の繁栄をもたらしている、と敬意を表します。

5月5日大洋丸に乗船、宇品出港、8日撃沈殉職



周 婉窈 2014 平凡社 (国)

嘉南大圳…嘉義—台南間の平野に烏山頭ダム(貯水量1.5億トン)からの灌漑により15万haの農地を開拓(台湾全農地の1/6と言われる)。米、サトウキビ、野菜(甘藷)の3輪作農法を定着させて台湾の農業生産力を飛躍的に向上させ、その価値は現在も変わらない。

○年譜から見る領有前後の台湾

西暦	和暦	記 事	内 容
1544		ポルトガル船が台湾島を発見	記録された最初→フォルモザ(美しい島)と命名 オランダ(東印度会社)が台南占領(1624) 鄭成功がオランダに勝利(1661・寛永7)
1684		清朝統治(領土に編入)	
1871	明治4	牡丹社事件	宮古島の漁民66人台湾に漂着し54人が殺害された
74	7	台湾出兵 征台総督西郷従道、次席/樺山資紀	大久保が征韓論を征台論に振り替えたとの説あり(当時の3大外交案件、他に樺太問題)。
75	8	日清交渉、大久保利通=李鴻章	殺害賠償10万円、他に出兵費40万円(化外の民の所業として清国に返還)
(国内事情)			
1873	6	徴兵令公布、地租改正	
77	10	西南の役	維新後の内乱終わる
85	18	内閣制度実施	初代内閣総理大臣伊藤博文
89	22	大日本帝国憲法発布	
90	23	第1回帝国議会、教育勅語	
1894	27	日清開戦	
95	28	下関條約で清国が台湾を割譲	條約締結4月、始政式6月17日 台湾総督兼軍司令官海軍大将樺山資紀 島内武力鎮圧10月20日(台南開城)
96	29	日本統治開始、初代総督樺山資紀、2代桂太郎(4月～)、3代乃木希典(10月～)	
		六三法(法律第63号)成立	台湾総督に法律上の効力を持つ行政・立法・司法の3権を付与(1国2制度)
		統治政策方針決定	外務次官原敬、同化・非同化2方針案を台湾事務局に提出→同化方針決定
97	30	台湾住民の国籍選択最終期限	
98	31	土地調査事業始まる	→終了1905(M38)
		児玉源太郎第4代総督(2月～M39.10)	後藤新平民政局長(2月～M39.10)
			新渡戸稲造臨時台湾糖務局長(M35.6～M39)
99	32	(條約改正)	
1900	33	鉄道開通(台南～高雄)、台湾製糖株式設立	台北からの縦貫線全通は1908(M41)
01	34	台湾公共埤圳規則	水利事業整備の立法
03	37	日露開戦→講和M38	児玉源太郎総督兼任のまま満州軍総参謀長
04	38	帝国政府の補助金辞退	
1910	43	台湾初の人口調査310万人	八田與一東京帝大工学部(土木)卒業、台湾総督府に就職
14	大正3	桃園埤圳を計画(主務八田與一)	→着工1916(T5)、完成1924(T13)
18	7	台湾電力株式設立	明石元二郎総督、官民合併の電力会社
		嘉南平原調査着手(主務八田與一)	
20	9	嘉南大圳着工	完成1930(S5)
23	12	(関東大震災)	本土義捐のため大圳工事延期(人員一時整理)
30	昭和5	嘉南大圳完成	
34	9	日月潭第1発電所完成	
41	16	大東亞戦争開戦	
44	19	台湾に徴兵制実施、同時に参政権も	
45	20	終戦、台湾総督府廃止(S21)日本統治終了	
48	23	蒋介石総統(中華民国)	
71	46	国連で台湾の代表権喪失、国連脱退	2代総統嚴家淦1975
78	53	第3代総統蔣経国	戒嚴令解除1987
88	63	第4代総統李登輝	2002(H14)来日予定中止 八田與一の事蹟を公開

○台湾領有までの国内

明治元年、五箇條の御誓文で発足した明治維新が翌年の藩籍奉還による新政治体制の構築に取り掛かっています。この掌に当たった参議(大臣に相当)の方々が20歳から30歳前後であった事が、征韓論を聞かせた名簿からわかります(明治6年)。

征韓派			非征韓派		
三条 実美	36歳		岩倉 具視	42歳	
西郷 隆盛	47歳		木戸 孝允	42歳	
板垣 退助	36歳		大隈 重信	35歳	
江藤 新平	39歳		大木 喬任	42歳	
後藤象二郎	35歳		大久保利通	44歳	
副島 種臣	45歳				

この方々を頂点として、恐らく20台の方々が、国内の平定を目的とする明治天皇の全国御巡幸を、それも賊軍の東北には2度の御巡幸を演出した事には感心させられますね。

国内の事は、明治10年の西南の役で内乱が終息した事から、外交面での不平等条約改正を最大の目標とした事でしょう。その為に徴兵制や税制に取り組んだ上で明治18年に内閣制度を実施し、明治22年の憲法発布で国際的に遜色のない体制を整えたのですが、それでも条約改正の実現には、日清戦争で実力と国際的信用を示すまで待たねばなりませんでした。

この長年月の苦心の結晶の1つであった台湾領有ですから、その統治を成功させて世界に示さねばならん、と考えた事でしょう。かてて加えて、下関条約の清国全権李鴻章が、内心では“化外の地”で統治に手を焼いた台湾など、手放しても惜しくない”と考えていた、との説まである場所だから、何としても植民地化を成功させねばならないのです。

その努力が僅か数年で世界の1員と認められて、最大懸案の条約改正が実を結んだと思うのです。

※化外の地…教化の及ばない地

※北守南進…ロシアの圧力が大きい北は守り、日本の発展の方向を東南アジアに向ける。2代総督桂太郎の持論

○領有以前の台湾との接触

●倭寇・御朱印船が活躍した頃は兎も角、徳川家光が鎖国政策を採った事により、表立った接触は記録されていない様です。

●明治になって宮古島の漁師が海難により南部に漂着し、土民がその8割の54人を殺害した事件が発生しています。地名その名の牡丹社事件。明治4年の事です。

維新政府は当然これを国際問題としたが、時^{あたか}も征韓論が盛に聞かされて、西郷隆盛の征韓が廟議決定されていたのを、外国視察から帰国した大久保が覆しました。大久保はその替わりに征台論に振り替えて不平士族をそらした、との説もあります。

兎に角明治7年に隆盛の実弟西郷従道を司令官とする征台軍を組織し、殆ど戦火を交えずに清国李鴻章と交渉した大久保が50万両の賠償金で解決したのでした。彼はこのうち10万両を被害漁民への補償に充て、残り40万両は清の謂う“化外の民の仕業”として返却し、注目していた諸外国に“日本の男を挙げた”との説もあります。

●明治27年の日清開戦には、征台軍、樺山司令官が澎湖諸島を占領したのみで、その俣下関条約で台湾の領有が決まっています。

戦火を交えない主権交替には、当然島内住民の反対があり、「抗日義勇軍」「台湾民主国」が結成されたが、澎湖島が占領された不利を覚って組織が解消されています。結局大事にならず部分的なゲリラ活動が数年続き、歴代総督を悩ませたのですが、これと言うのも、真つ先に澎湖島を征圧した戦術眼に敬意を表すべきものでしょう。

○台湾を領有してから

●清国が長年“化外の民”として手を焼いて来た原住民との軋轢^{あつれき}を日本がその俣引き継いだのです。首狩り族を含む10を超す蕃族が九州程の面積、しかも山岳地帯にそれぞれの領域を持って独立割拠する中へ乗り込むのですから、武力の背景を必要とします。従って台湾総督は初代樺山資紀海軍大将から第7代明石元二郎陸軍中将まで24年にわたり武官総督が続きました。

- 2代以降は総督が陸軍に移り、桂太郎中将が政界進出を目指して5ヶ月で中央へ戻り第3代に乃木希典大將が赴任して来ました。彼の誠心誠意の決意は固く、非衛生、瘴癘の地へ家族を伴い、老母をこの地で失っています。マラリアだった様です。

その彼も誠意の通じない蕃族のゲリラ対策に悩まされて「乞食ガ馬ヲモライタル如ク、飼ウ事モデキズ乗ルコトモ出来ズ」との有名な書状が残されています。

條約改正を進めていたこの1両年の間に、中央では植民地政策の論議が進められ、桂太郎の「北守南進」*を基本に、他国の植民地政策(英国—インド・香港、フランス—ベトナム・インドシナ、オランダ—インドシナ)を学んだ結果、英国方式の「本国から独立した特別統治」が採用されています。

その結果として第9議会法律第63号—明治29年—通称六三法—が時限立法で成立し、これにより律令権(行政、立法、司法人事)が総督に与えられ、所謂1国2制度となりました。

この権限を実際に行使できる人物として、第4代の総督に児玉源太郎大將が任命されています。彼は豫ねてから相談相手として力量を買っていた後藤新平を総督府元締めの民政局長とし、新渡戸稲造糖務局長はじめ、台湾の開拓者リーダーに値する数多くの人材を揃えました。

児玉総督の初仕事は、清国以来の旧制度を固守する官僚1,080人を一挙に更迭したのは驚きですね。それだけの権限のある、一種の独立行政が可能なのでした。

これと共に腰を据えて農業殖産を進めるため、主産物のサトウキビと米について、前者は渡米して研究を進めていた新渡戸稲造を、後者は明治44年北大農学部卒業の磯永吉を農業試験場で米の品種改良に当たらせています。磯技師は在来種(インディカ系)の改良の他に15年程掛けて内地米(ジャポニカ系)の台湾での栽培に成功し、蓬来米として今日まで定評のある米作を確立しています。

それと同時に台湾農業振興の基本である灌漑について、明治34年に台湾公共埤圳規則を制定しています。

児玉総督は、殖産は勿論、先ず瘴癘の地と称された非衛生極まりない状況の改善に取り掛かり、明治29年卒業の浜野弥四郎技師(上下水道土木)をその師バルトンと共に招聘する等、教育と併せて万全の対策を講じました。これと言うのも議会の面倒のない独

立行政の賜でしょう。近年の李登輝さんが「宗主国と言うものは、良い顔をしたがるもんですよ」と仰ったとの事ですが、当時は国を挙げて近代化に邁進していたから、台湾の新天地に理想を追う事も重なったのでしょうか。(中華思想ではこうはならない)

児玉総督が使命感に燃えて取り組んで居られた事は、あの日露戦争の大変な時の満州軍総参謀長の重責を、ハンコを後藤民政局長に預けた兼務の俥果たされ、明治39年病死の直前まで、台湾統治に尽粹された事で判ります。

そしてこの成果は明治38年に帝国政府からの補助金を初めて辞退している事から窺い知れますね。日露戦後の財政事情もあったとは思いますが、実力なしにこんな事は出来ない。

以上の様々な事が、2頁前の年譜から読み取れると思うのです。何れにせよ、「前例がないなら俺が前例を作る」との意気込みがヒシヒシと感ぜられますね。

○八田さんの台湾就職

こんな背景のなかで、八田さんは東京帝大土木科卒業、即、台湾総督府に就職されています。当時の帝国大学が「国家権力の中枢を担う人材育成」を目的としていたなかで、工学部とくに土木科の卒業生が殆ど官途に就かず、民間の実務に向って居られた事は特筆に値します。これと言うのも、古市公威、広井勇等の土木科開祖のお蔭でしょう。広井さんは札幌農学校のクラーク博士の訓育を「工学は人の役に立つ事をやるのだ」と実践した経験を基に教育に当たって居られたのです。八田さんの数年前に卒業して官途(内務省)に就いた青山士さんが、後年、信濃川大河津分水工事の所長として分水記念碑に記された銘文に、その活かされた精神が窺われます。この事からも権力志向を排する工学技術者としての基本精神が伝統となっている事が判りますね。



大河津分水記念碑の銘板(工事事務所長青山士)

八田さんの出身地、金沢は、徳川末期の前田藩主の方針で、私有化を前提とする河北潟の干拓開田が奨励され、八田さんの祖父の代に地主の名家に入っている様です。五男末子の與一さんも、灌漑、開田の事情と北前船で一時代を造った豪傑高田屋嘉兵衛の事蹟を幼時から教わって居られたのでしょう。幼にして大風呂敷と言われ(ガキ大将も)、これが一生を通しての評価でした。

明治43年卒業の同級生31氏は、10年後の同窓会名簿によると、鉄道関係7氏、外地勤務が八田さんの他朝鮮総統府勤務1氏となっていて、官途に就いた方は貴族院議員、東大教授を含め3氏のみ(うち2氏が北海道庁)と、時代の背景が感ぜられます。保登元

台湾総督府には既に12年先輩の山形要助土木課長が居られ、後輩八田さんの実行力のある大風呂敷を理解し、全面的に信頼して、思う存分腕を奮わせられたのでしょう。八田さんも“前例がなければこの俺が前例を作る”と山形課長の期待に応えられたのですが、この事は、実力と、それに増しての研究努力なしには実現する筈がない。その過程では当然失敗の経験が入る筈ですから、お互いにその辺を心得ての麗しい関係を、羨ましく感じますね。これと言うのも、開拓者精神に燃えた独立自治体の成果ですね。現在の日本の政治形態では望むべくもない事が、土木で飯を喰って来た者として残念だが仕方ありませんね。

○八田さんの事蹟

総督府土木技師としての八田さんは、衛生環境の改善を含む土木工事から始まり、桃園埤圳の事業に参画されています。

台北に注ぐ淡水河の上流に石門ダムを設け、その貯水を活用して桃園平原の農業を拡大したこの事業は現在も3万5千haの灌漑に生きています。



この過程で八田さんの養った技術が認められたのでしょう。埤圳工事の半ばにして、彼が提案した嘉南平原開拓の調査に主務となって取り掛かっています。

「例の大風呂敷」と言われた大規模の計画は、明石元治郎総督(日露戦でのロシア内部工作で有名)の全面的賛成を得て、東洋一の烏山頭ダム建設から網の目の様に張り巡らされた用水路に至る大事業で実を結びました。

この事について幾つかの資料から、土木科の後輩としてまとめて見る心算でしたが、最近古川さんの近著「日本人に知ってほしい『台湾の歴史』」を入手して、その中の「嘉南大圳の父」八田與一^{うでんとう}の項でその事が尽くされているのでその俚引用させて頂く事にします。

「嘉南大圳の父」 八田與一

1942年以降、毎年5月8日になると、烏山頭水庫の起点になった小高い丘の上で、嘉南農田水利会の人々の手によって、八田與一技師の慰霊祭が行われる。

この慰霊祭が行われる5月8日は、昭和17年に、フィリピンの綿作灌漑設備を調査するために、現地の調査責任者として大洋丸に赴任する途中、アメリカの潜水艦によって撃沈され、不帰の客となった八田與一技師の命日である。



5月8日の命日に毎年行われる八田夫妻の墓前祭

嘉南の人々は毎年こうして、慰霊祭を行って八田技師への感謝の気持ちを、決して忘れないように努めている。

その八田技師は、1886年(明治19年)石川県金沢市で生まれた。

第四高等学校を卒業後、東京帝国大学土木工学

科に入学し、広井勇教授に学んだ。1910年に卒業するとその年の8月、24歳の彼は直ちに台湾総督府の技手として台湾に渡り、総督府内務局土木課に勤務するようになった。

八田技師が渡台した頃は、日本が台湾を領有して15年たった頃で、台湾の近代化が急がれる時期に来ていた。まさに、土木技術者にとって台湾は、新天地だったのである。

八田技師は港湾・衛生工事を担当した後、発電灌漑工事担当に移り、桃園埤圳の設計、施工を行った。

この工事を通して業績を認められるようになった八田技師が、将来の電力不足と米不足を解消するための全島調査に参加した際に、目をつけたのが、当時不毛の土地と言われた嘉義庁と台南庁にまたがる嘉南平原だった。

南北92km東西32kmの嘉南平原は、濁水溪と曾文溪にはさまれた、年間降水量が2,500ミリもある地域であった。ただ、この雨は5月から9月に集中して降るため、雨期には洪水を引き起こし、反対にその他の月は乾期となって、降水はほとんど見られず、水不足を起こして土はひび割れ、風が吹くと土ほこりが舞い上がり、米はおろか他の作物もあまり穫れない大地であった。

その上沿岸付近では、台湾海峡から吹き込んでくる潮風と、砂を通して浸み込んでくる海水によって塩害を受ける、まさに洪水と干魃^{かんぱつ}と塩害の三重苦が支配する土地であった。

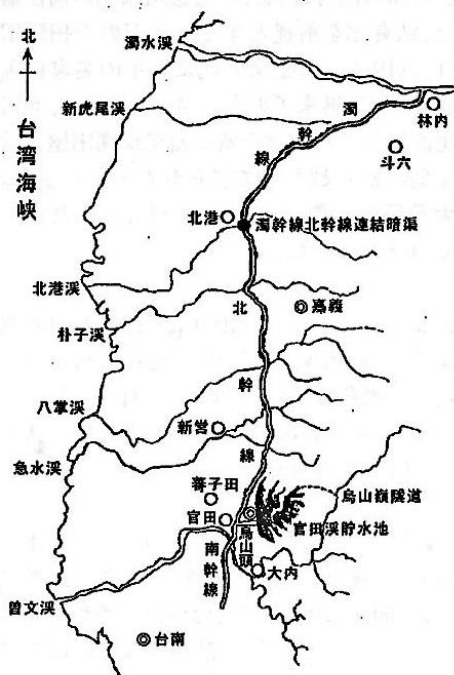
八田技師は、この大地に一大灌漑排水土木工事を行えば、15万ヘクタールにわたって土地改良ができ、洪水も水不足も塩害もすべて解決した上に、米を作れば7万5,000トンもの食糧増産ができるようになると思った。

この計画は下村宏民政長官の英断と明石元二郎総督の決断によって推進されることになり、32歳になったばかりの八田技師は、80余人の部下と共に、嘉南平原での正確な現地調査を実施し、調査結果から具体的な工事計画を立てた。

その計画はまことに雄大で、他の技術者が「八田の大風呂敷が始まった」と言うくらい、スケールの大きい計画であった。

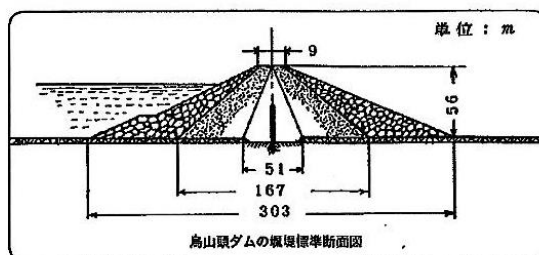
台南市の北に曾文溪と呼ばれる台湾第4位の川があり、その支流に官田溪という小さな川が流れている。

八田技師はこの官田溪の上流の烏山頭^{うざんとう}と呼ばれる場所に、一大土堰堤を築いて川をせき止め、自然の谷あいを利用して一大人造湖を造ることにし



八田技師の考えた15万ヘクタールの嘉南大圳内の河川等 ②

た。そしてこの人造湖に水を貯えるため、烏山嶺と呼ばれる山に、全長3,107メートルの隧道(トンネル)を掘って、曾文溪から導水することにした。しかしこのダム湖の水だけでは9万8,000ヘクタールの土地にしか灌漑できないため、残りの5万2,000ヘクタールの土地は、直接濁水溪の水を取り入れ、幹線水路で結びつけることにした。



烏山頭ダムの横断標準断面図

こうして15万ヘクタールという、香川県に匹敵する土地への灌漑土木工事の基本計画が、造られたのであった。

この工事は嘉義庁と台南庁にまたがる広大な土地におよんでいたために、嘉南埤圳では言葉が負けると考えた総督府は、嘉南大圳と名付け、6か年の工期と4,200万円の予算で1920年(大正9年)から、着工することにした。

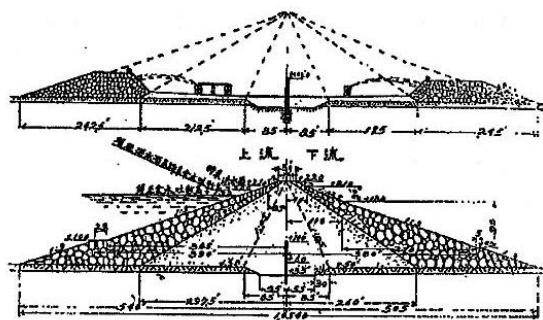
主な工事は烏山嶺隧道工事、烏山頭堰堤工事、給排水路工事、に分けられて進められた。

工事は原生林の中で、しかもマラリア等の風土

病がはびこる場所で行われる巨大工事であったため、想像を絶する難工事となった。

烏山嶺隧道工事では、隧道を掘り進むうちに石油ガスが噴出したりし、それにランプの火が引火して大爆発を起こしたため、50名余りの死者を出し、その後も泥土が噴きだしたり石油の噴出が起こったりし、工事は再三中止になり、計画も度々変更された。

また烏山頭堰堤工事は、高さ56m全長1,273m底部幅303m頂部幅9m貯水能力1億5,000万トンにもなる、当時、世界一のダムをつくるというものであった。しかもこの土堰堤をつくるのに、日本はおろか東洋でも未だかつて誰も試みなかった「セミ・ハイドロリック・フィル工法」(半射水式工法)を採用した。この工法は土や砂それに石をつき固めて築造する乾式のロックフィルダムではなく、土・砂・石を一緒に積み上げておきジャイアントポンプで強力に水を吹きつけ、微細な粘土・シルト・砂・砂利・栗石・小石・大石の順に流して、中央には粘土層を集め、外側には大石を残すという独特の湿式ロックフィルダムであった。



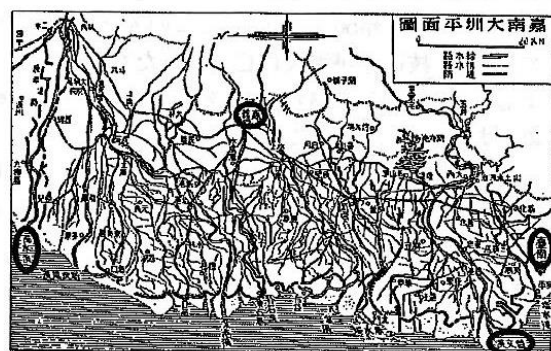
八田技師が設計した官田溪土堰堤の横断面図 (91)

この工法によるダムはアメリカに数例あるだけで、東洋では唯一であり、後日八田ダムと呼ばれるようになる。

またこの貯水池は、満水になると、あたかも珊瑚樹が堰堤から枝を伸ばしたような形になるところから、完成前に下村宏民政長官によって、珊瑚潭と名付けられた。

給排水路工事は、給水路と排水路を合わせて1万6,000kmにもなる距離であり、この距離は台湾本島を13周もするというもので、まさに網の目にように嘉南平原に張りめぐらされた。

その上、この水路には分水門・給水門・余水吐・水路橋・鉄道橋・車道橋・歩道橋・落水工・暗渠・潮止自動排水門・総延長96kmもの潮止堤防など、主要建造物だけで4,000余ヶ所もつくられた。



日本統治時代の嘉南平原の姿。平原の北部は濁水溪の流水を用い、南部は烏山頭ダムからの水で大地を潤そうとしていた (92)

これらの工事がすべて完了し、珊瑚潭に水が貯えられはじめたのは1930年(昭和5年)の春のことであった。

10年間の歳月と5,413万円余りの巨費を飲み込んだ、嘉南大圳が完成した。この嘉南大圳の完成によって、不毛の土地と呼ばれた15万ヘクタールの大地は、緑の絨毯を敷きつめたような緑野に変わり、台湾最大の穀倉地帯となっていた。

嘉南平野に住む60万人もの農民は、流れてくる水を目にすると「神の水だ、神の与えし水だ」と歓喜の声を上げ、その完成を喜びあった。そして、難工事に挑戦し青春を捧げた八田技師に、心から感謝し「嘉南大圳の父」という言葉を贈り、その恩を終生忘れないようにした。

一方、嘉南大圳の工事に携わった人々で組織された交友会では、工事の記念として八田技師の銅像をつくり、翌年の7月に烏山頭ダムの起点になった丘の上に置いた。

やがて工事を終えた八田技師一家は、烏山頭を去り、台北へ帰っていった。八田技師は、再び総督府の勅任技師となり、台湾のさらなる開発に取り組んでいた。

まもなく大東亜戦争が始まり、八田技師は日本の占領地であったフィリピンの綿作灌漑施設の現地調査を陸軍から命令され、1942年(昭和17年)5月5日3人の部下と共に、広島県宇品港で大洋丸に乗り込んだ。この船には、日本の誇れる技術スペシャリストが、1,000人余り乗っていた。

出港して3日後の5月8日、九州の南西、五島列島の先の男女群島沖にさしかかった時、アメリカの潜水艦が、大洋丸めがけて魚雷を4発発射し、その内の三発が命中した。午後7時45分のことである。大洋丸は大火災を起こし、一時間後に817名の人たちと共に海の藻くずと消えた。その中に、八田技師と二人の部下が含まれていた。

八田與一、享年56歳であった。この大洋丸の沈没で、優秀な技術者が大量に亡くなったため、日本による南方開発が2年遅れた、と言われるくらいの惨事であったが、軍部はこれを隠した。

戦争が激しくなり、金属が不足してくると、昭和19年に金属供出令が作られ、八田技師の銅像が供出されて烏山頭から姿を消した。嘉南の人々は八田技師の死と銅像の供出を悲しんだ。しかし悲しみはこれだけで終わらなかった。

日本は敗戦し、ポツダム宣言を受け入れた。その結果、日本は台湾を放棄することになった。当然、日本人は台湾を去らなくてはいけなくなり、台湾に残ることは許されなかった。

台北から疎開のために烏山頭に来ていた八田技師の夫人、外代樹さんも例外ではなかった。

敗戦から2週間後の9月1日未明、八田技師がその生涯をかけて造りあげた烏山頭ダムの放水口に身を投げて、夫の後を追ったのである。45歳の若さであった。

嘉南の人々は二人の死を深く悲しんだが、この悲劇は、戦後のどさくさに紛れて、忘れ去られようとした。

しかし、嘉南の人々は、嘉南大圳の生みの親が誰であるか決して忘れてはいなかった。

八田夫妻が永遠に烏山頭で眠ることを願った嘉南の人々は、八田夫妻の墓をつくることにした。しかも日本式の墓にするため、大理石ならただ同然の台湾で、御影石を探した。やっと高雄市で御影石を発見した人たちは、日本式の墓を注文して購入し、かつて八田技師の銅像の置かれていた場所の



すぐ後ろに建立した。終戦の翌年、昭和21年12月15日のことである。

その頃、供出されてなくなっていた八田技師の銅像が、台南の赤嵌楼の近くの闇市で売られているのを偶然耳にした嘉南農田水利協会では、直ちに買い戻し、烏山頭に持ち帰ってきた。日本人の銅像や墓が壊されていく中で、長い間嘉南農田水利会烏山頭管理事務所の地下室に隠していたが、元の場所に置くことにした組合では、銅像から母型を取り、1981年(昭和56年)の1月1日、かつて銅像が置かれていた場所に、今度は台座までつけて設置した。

今日、八田夫妻は起工地点である丘から、青春を捧げて完成した美しい珊瑚潭を静かに見下ろしている。

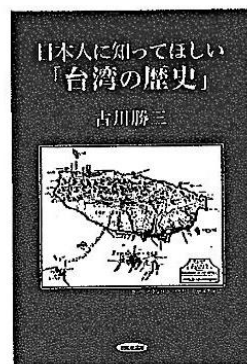
その珊瑚潭から送られた水は、嘉南平原を潤し、80年余りたった今日でも、嘉南の人々に多くの恩恵を与え続けている。



大正15年頃に烏山頭宿舍前で撮影した
八田技師の家族



昭和17年4月8日に台北幸町
の官舎で撮した八田夫妻の写真



より転載。

○烏山頭水库に先人の遺徳を偲ぶ(旅行私記抄録)

2005 (平成17)年5月11日、台南のホテルに日本語のわかるタクシーを呼んで貰い、午後の現地を訪ねて来ました。

- 13時出発。縦貫公路①を北上して30分。右手に鋼製水路橋が見え、リベット構造なので、75年前の



八田技師の作品に違いがない、と思うまもなく

“烏山頭水库”の道標に従って右折。直ぐに灌漑用水路が見え、これが「嘉南大圳」。土手にのぼると約10mを

超える大用水の分水点でした。左右に分かれる分水の



ゲートが設けられ、左側の堰が工事中で、その先は先程の水路橋に通じるのでしょう。

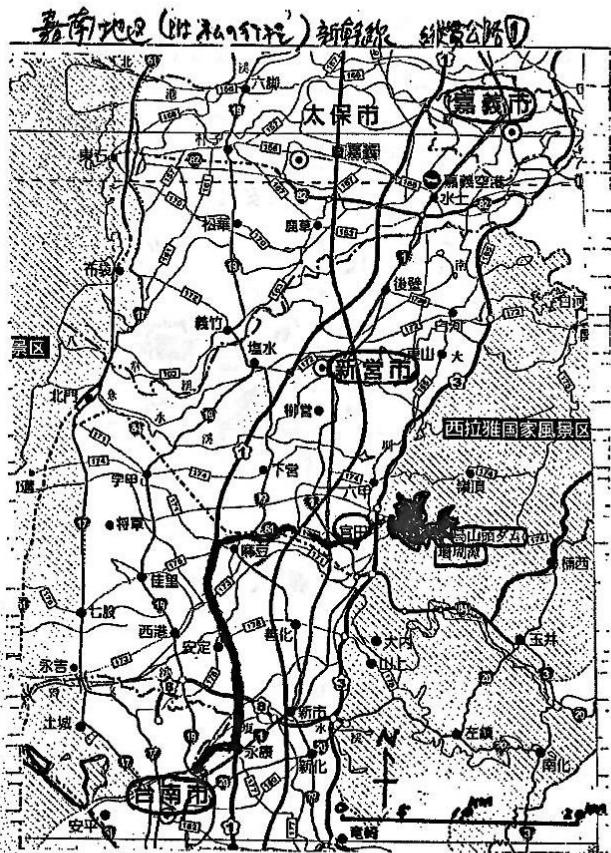
周囲の水田はもう稲の登熟期で用水を終り、水面は静かです。この時期に改良・改修を進めるのでしょう。この大水路に満々と流れる大動脈は、台湾全土の平野地の1/6を占める嘉南平野15万haを潤すに充分な貫禄があります。

タクシー運転手の揚さんがバック弁当の遅い昼めしをパクついている間、しばし佇むひと時でした。

- 烏山頭水库入口は国道①から15分くらい。丁度14時に到着。台南市から50kmくらい、40分の距離でした。



入場券を案内嬢から受け取っていると、奥から爺さんが“日本から来たのか？”“そうだ日本から来た”と答えると取って返して、ゴソゴソとブルーのA4版3枚を持って来て呉れました。見ると「嘉南大圳の父・八田與一氏」と題して、大圳創立60周年記念の陳彩官氏の冊子の日本語版コピーです。敬意を土台にしての懇切な内容に、あらためて我が大先輩の遺徳に触れ、思わず目頭が熱くなるのでした。



- いよいよ聖地へ、と正面の丘へ車を向けると、頂上に剣橋大飯店の標示があり、地図に“国民宿舎”とあるのがこれらしい。周辺を眺望してのひと休みに丁度良い。

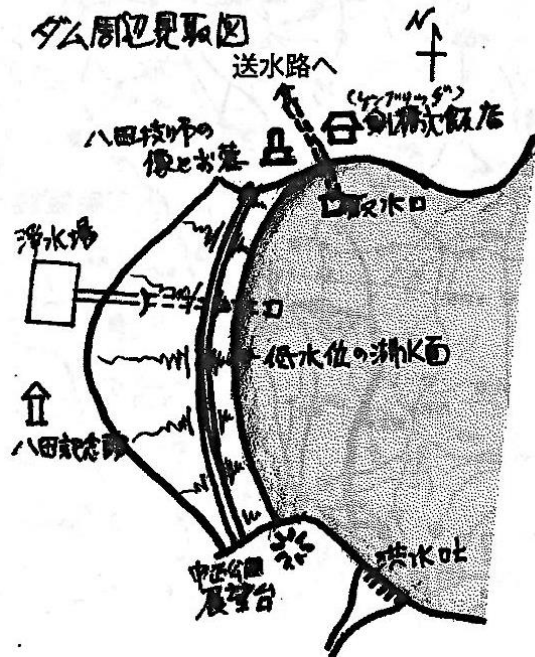
左にダムと珊瑚潭。水稻の用水が一段落して



最低水位なので、長大なダムの姿が良く見え、その先は台南まで続く大沃野。中央の丘の緑が八田さんの銅像とお墓の森に相応しい場になっています。

憶うに30歳を過ぎたばかりの八田技師が、幾度この丘に佇んで思案を巡らせた事か。あの山、この沢を渉猟した末のこの丘で。ダムサイトを此処に決めてからは尚更だったでしょう。

- ダムの平面形が逆アーチ型になっています。何しろ50mもの大きなアースダムだから、土の変形を考えると、アーチ型かせて直線にする処。大学同期の石井頼一郎博士は、富山県庄川の小牧ダムで、70mのコンクリートダムに安全を期したアーチ型



を採用したし、古くは弘法大師が、当時の誰もが成功しなかった満濃池をアーチ型にした土堰堤で成就しています。技術者として一切を承知して逆アーチ型を選んだ理由は何だったのでしょうか。岩盤の関係か、真逆、少しでも貯水容量を増す為だとも思えない。

それに満水位をどうやって決めたのでしょうか。見える右岸の丘は若干余裕があるから左岸側の状況、とくにアースダムの最弱点になる洪水吐の設計から決めたのでしょうか。

更に、流量資料は？瘡痍の地と言われた時代の測水作業が思いやられます。熱帯域に属する原生林の中での測水作業は、温帯には考えられない大変に困難な事だったでしょう。

明治43年台湾総督府に就職し、台北に近い桃園県の灌漑事業に従事した後、大正8年に着工するまで、測水に費やした年数は長くはない筈です。八田技師の使命感はもとより、その上司、更には上層部の台湾統治についての、心底からの熱意がなければ、実現は望むべくもない状況だったと、私には想像できます。

嘉南大平野を背景に、烏山頭水庫を眺望して思いは尽きず。只々、当時の為政者と、それを支えた技術者方の事蹟に、頭の下がるばかりでした。

- ホテルから丘を50m程下ると八田興一氏記念像です。奥に夫妻のお墓があり、何故か朱が入って居ます。現地の方々が戦後建立して下さった日本式のお墓ですが、没後に朱を外すことまで、台湾式にはない、との事でした。

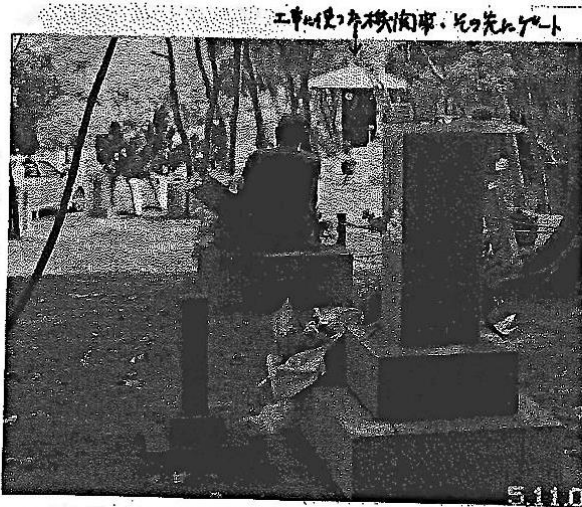
工事の進捗を観察するには究竟の地点で、墓域に相応しい眺望です。自分が会津の山の中で死に物狂いで水力発電所の建設に従事し、死んだらダムの対岸に埋めて貰いたいとまで思い詰めた事が、つい昨日の事の様に思い出され、此処に八田夫妻が眠って居られるのか、と崇高な気持で手を合わせました。



↑金沢市から贈られた鍔鉾(琴柱)灯籠(兼六園のシンボル)

3日前の5月8日に例年の墓前祭が行われ、花束で埋まって居ます。像の花束の上に大関のワンカップが載っています。なお良く見ると、供花の脇に、隠れる様に一升瓶が。越乃寒梅の特選酒が栓を開けて供えてありました。故国からの参詣も続けられているのです。

周囲の大木は80年前に、思案する八田技師に緑陰を提供していたのでしょうか。右肘を立て膝に載せた銅像は、静かにダム湖水と嘉南平野を見守っていました。それに応える地元の熱い想いが、視線の先に工事に使った機関車等が置かれているのも関係者のご配慮でしょう。



- 烏山頭水庫の本体は、記念像から木立の中を可成り降りた所から始まります。頂部に管理用の道路があるが一般車は通さないので、揚さんに別ルートで先廻りして貰い、1,300mもあるダムの上を歩きました。右岸から初めて先ずダムを貫通する鉄管が目につきます。ダムを離れた右岸奥に取水口と発電所があり、後年になってサイフォン構造の取水路を増設したのでしょう。56mもの高さがあるダム本体は南国の土壌堤らしく、水位が下ると直ちに草で覆われます。



ブロック造りの多数の花壇の間を歩いて行くと、ダム頂の中央部に、日本の測量標識その傍の、花崗岩の石柱基準点があり、今1つ、道路のセンターに真鍮板の水準点もありました。恐らくアースダムの経年沈下を観測する為に八田技師が設置し、現在も観測が続けられているようです。



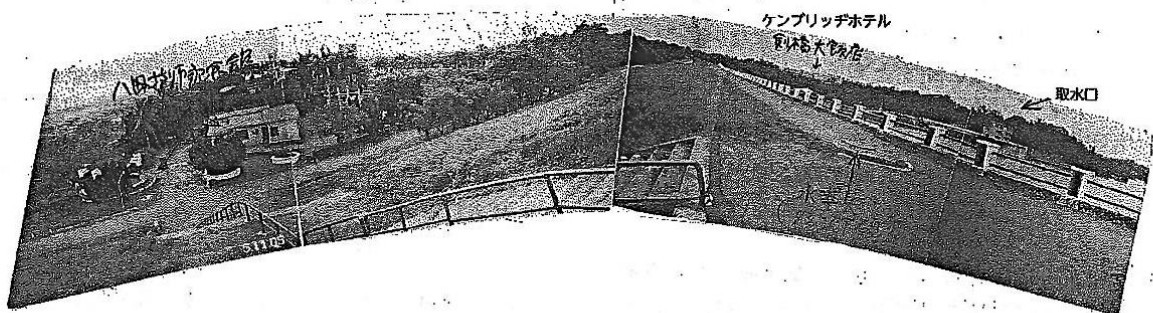
ダムの保安に最も重要な洪水吐が見当たりません。左岸側の奥にある様です。奥側へ廻って見ると大規模の構造物があり、湖に釣り糸を垂れる人々が居ました。説明板によると溢流容量は1500m³/sもある。流石に熱帯の豪雨への備えに遺漏のある筈はない。ただ気になるのは、これだけ大量の水が流れた先の洗堀ですが、感傷の旅に来たので調査に来たのではないから、今日はこれでお終い。

- 尋ね終わって見ると、八田技師唯一人を賞揚しているのですが、「一生功成って萬骨枯る」の印象は全くありませんでした。

明治新時代の“国家権力の頂点を構成するに相応しい人材を養成する為に”設立された帝国大学を卒業しながら権力の途へ進まず、台湾の地に骨を埋める覚悟を持って赴任された八田大先輩が、その技術と管理施工の能力を自得されて、結果として地元の発展・繁栄に生涯を捧げられた信念は、まことに尊いものです。

地元の方々も、国が替わり政治形態が幾變遷した今日でも変わることなく、静かに、深く敬愛して居られる雰囲気、あの大きなダムを中心に、ひしひしと感じられるのでした。

後日この事蹟をご存じないロータリアンに、以上の事をかいつまんでお話ししたところ、大変感動して「この事を知らなかった我々は、日本の民族として恥ずかしい」と漏らして居られます。3年後の機会には是非とも同志を語らって、一升瓶を持参して再訪せねばならないと考えています。^{ツライチン}“再見！”



○“神様”の由来

- 台湾では、現在も新幹線建設に尽粹されたJR技師島秀雄さんが、「新幹線の父」と尊敬されています。単に専門家技師として技術を根付かせた事よりは、台湾での次世代が、彼等だけで今後の運営・発展が出来るまでに育て上げたことに因るのです。現在も台湾では「父」の尊称が活きています。

後藤 新平	台湾近代化の父
新渡戸稲造	台湾製糖の父
磯 永吉	蓬来米の父
末永 仁	蓬来米の母
浜野弥四郎	台南上下水道の父
鳥居 信平	台湾地下ダムの父
新井耕四郎	台湾紅茶の父
八田 與一	嘉南大圳の父
羽鳥 又男	台南市の恩人
鳥居 龍蔵	台湾民族学の父
松木幹一郎	台湾電力の父

それぞれに銅像が建てられたが、戦時中の金属回収で失われ、現存するのは八田さんのみの様です。(失われた像は実業家許文龍さんの、自作の胸像で補われている様です)⑤

これらの「父」に共通するのは、その成果が現世代まで引き継がれ根付いている事でしょう。明治以来の殖産技術移植についての基本姿勢であった「育成」が正しく根付き、義に篤い台湾の人々がこれを恩義と心得て呉れている、と感嘆せざるを得ません。

特に八田さんに関しては、戦後まもなく入水された奥様と共に、烏山頭ダムの傍らに地元の方々がお墓を建て、文字通り「台湾に骨を埋めた神様」として、毎年の命日祭が元首も参列して営まれているのです。

- 抑も神様とは、現地の人々は八田さんの何処に神性を見ているのでしょうか。“多くの人を心酔させる資質・能力、またはその持主(カリスマ)”と、それ以上の“人知を以てはかる事の出来ない能力を持ち、人類の禍福を降すと考えられる威霊”つまり“守り神”なののでしょうか。中世ヨーロッパの都市も守護聖人を持ちましたね。

事情に不案内ながら、私なりに考えてみましょう。

- 八田さんは、嘉南という、広大な土地と人口を持つてはいるが、特定の場所での開拓大事業を、現地の最高責任者、経営者として完成させています。

他の「父」と、その点が異なっていると思うのです。更に夫妻揃ってその地に骨を埋めて居られるのですから、私の想像では、“守護神”として尊敬されているのではないのでしょうか。



- 当時の世情は、封建時代の家格・身分制度を文明開化で否定したばかりで、民族・人間の性格はそう簡単に変わるものではない。増してや植民地の台湾では！想像するに難くはありませんね。

その中で八田さんは、自治・秩序に自信があったのでしょうか。一視同仁[※]を徹底して貫かれています。工事区域内のことでしょうが、警官の配置を断固断ったことでそれが証明されているし、現地の工碑の氏名欄には差別なく殉職の日時順の氏名が残されています。

“バッテンライ(八田が来た)”との警句が残されているとの事です。が、“矢筈しいオヤジ”で秩序を守ったのは、単に頑固な技術者であった丈ではなく、マラリヤ対策のキニーネを全員に配り、苦い薬を服まずに棄てない様、個人の家に上がり込んで目の前で飲むまで、恐れ眼を光らせた、など、人間愛の最たるものですね。

- 現場に事務所を構えると同時に、長期戦の心構えとして、全作業員が現地で家庭を営むに必要な、学校を含めた施設を整備されています。結婚間もない、若い外代樹夫人も3人の幼児を伴い、率先垂範して転居。家庭を守る日本古来の役目に徹して賢夫人内助の功を示された、との事です。長男晃夫さんは、この小学校から後年父の母校・東京帝大土木工学科へ進まれています。(戦後、愛知県土木部長を経て平成[■]年没)

明・清時代からの封建制で辺地愚民政策に馴れた人々には画期的な事だったと思えますね。

総督府挙げての全面的バックアップもさる事乍ら、時が経つにつれて八田さんの一視同仁の基本姿勢が現地の人々に滲透し、心服されるに至ったと思います。その事が、現地の発意でご夫妻のお墓が建てられるに至った、と言えるでしょう。

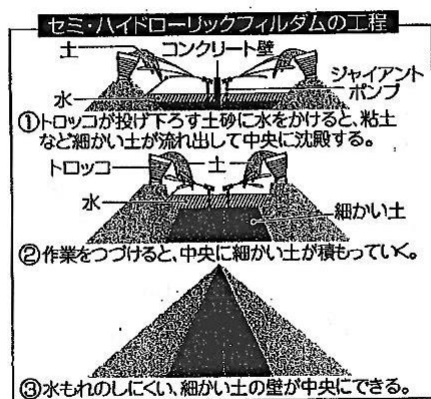
※一視同仁…すべての人を一様に取り扱い、同じように愛すること。

● 水力技術者を志した私は、矢張りダムの事に関心があります。大学同級の石井顕一郎さんが神通川の80mクラスの小牧ダムをコンクリートで造ったのが丁度この頃だから、日本のコンクリート大ダム技術は根付いていました。八田さんがコンクリートダムを採用しなかったのは地質調査の結果からでしょう。

● 採用されたアースダムは、最寄りの材料を基に設計するのが常道です。台湾は元来荒れ川だから、濁水溪の名の様に、土石、砂、粘土の材料に事欠かない。しかし当初計画500万 m^3 、最終的には1000万 m^3 もの原石山はそうザラにあるものではない。八田さんが20km程の大内で曾文溪が玉山(新高山)から150km流下した処に十分な土石材料を発見したのは幸運でした。

当時の学問、とくに土質工学の分野がどの程度のレベルであったか詳かではありませんが、「土の工学的性質」が体系化されたのは、昭和10年代になってからだったでしょう。ましてや土質試験法が確立する以前の事として、八田さんがどのように苦心してダムの透水性に確信を持ったのか？部下を駆使した大量の地質調査、土質試験の結果を考え抜かれた上での事と推察するのです。初現場で「勉強は教わるものではない。自分でやるものだ」を体験した私には、身に沁みて判りますね。

● 高さ56mのアースダムの施工にセミハイドロリック工法を採用したのは、幾多の事例のなかからの、独創的な発想の様です。あの銅像のポーズで考え抜かれたのでしょうか。私も初めてこの工法を知り、一見奇異の感を持ったが、中々合理的な方法です。水で流せば微粒子になる程流れて来る。中心にコンクリート壁を置いて左右から粘土水を



集め、十分に沈殿させて粘土コアを造る。これには、原石山の材料試験の結果に合わせ、粘土質を加えて調合する煩わしさがあるが、この努力を厭わない。



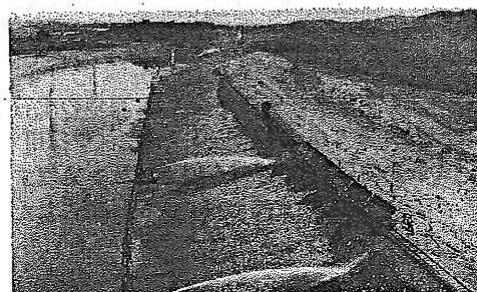
堰体内排水暗渠配置断面図(単位:尺) 嘉南農田水利会提供

この粘土が水中で締め固まる条件を、幾多の実験で確かめられたのでしょう。中心のコンクリート壁の高さは、単に最終的な貯水量から決めたのではない様に思えるのです。この壁は、ダム底部の滲透水の流れ(パイピング)を遮断する為にも必要ですが、それ等の効用を多角的に考えられ、それを裏付ける実験・計算の結果と考えると、矢張り技術者としても神域に達して居られますね。“大物は大風呂敷から始まる”そして、“他人に負けない。特に外国には！”の根性です。

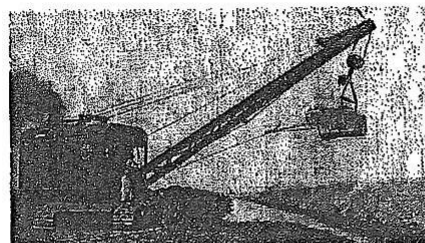
“土木工事は人類の為にある！”



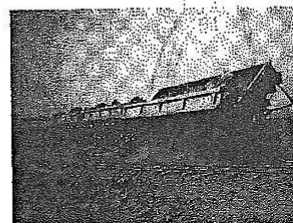
大正12年2月、堰堤工事を見守る八田技師(左上の右側)



ジャイアントポンプによる土堰堤での射水作業



烏山頭ダムの建設現場に導入された、米国製のスチームショベル



エアードンプカー

現代の台湾

- 仙台丸善で「図説台湾の歴史(日本語版、2012)」を見付けました。著者の周婉窈女史は「1994年末にアカデミズム史学の「領域」の1つとして「台湾史」が認められ始めた」と言っていて、戒厳令が解かれて、「漢人開発史観を離れた独自の文化観」が始まった事を窺わせます。因みに1956年生まれの彼女は、国立台湾大学で歴史学を修めた後イェール大学で博士号を取得(1991)、現在は母校で歴史学科教授。日本植民地統治期の研究を中心に明、清時代を広く研究対象としている様です。

2007年初期のこの本が既に3版を重ね、最も良く読まれている、との事ですが、日本統治時代の殖産事業には触れていない。台湾の人にとって、或日突然割譲された50年が過ぎ、引き続き蒋介石統治、戒厳令下の40年は「歴史研究と言論の自由が失われていた」と彼女が書いています。

ですから、先ず旧宗主国明・清の200年の歴史が甦り、日本の殖産努力はその次になるのでしょうか。彼女の次の視点が此処に来るのを期待しましょう。

- 八田さんの事蹟について、台湾でお会いした多くの方々は「その話は聞いた事がある」程度の認識でした。流石に台南の現地では神様扱いでしたが、一般には日本統治時代の殖産努力の認識を李登輝さんが復活して呉れても、何れ時間と共に過去に埋没して行くのは仕方ありませんね。

とは言っても、殆どの全ての人が「蒋介石が来て日本の犬(番犬の意)が去ったが豚(貪欲でヒトデナシ)が来た」と話して呉れて、実態は明らかです。

現代の台湾は心ある方々が大陸との関係に苦心され、香港の「一国二制度」の甘言に最大級の警戒心を持っています。

最近(2014年9月)、嘉義近郊の高速道路で非常時の軍用機発着演習が行われました。気付いて見ると、一般には詳細な地形図が手に入りません。日本統治時代の地図が当然出版されている筈ですが、戒厳令で公開されない俁現在に至っているのでしょうか。航空機上での写真撮影も禁止の俁の様です。

10年前に台北で最初に目に付いたのは、地下鉄の入口が周囲より約1m程高く囲われていた事です。私の眼には、原子力戦争に備えて地下鉄を拡充した時代に本気で都市での戦闘に使う塹壕に見えて、案内者の説明「洪水に備えた対策」が空々しく聞こえたものです。

特筆すべき事は、競馬場やパチンコ屋が全然ない。これは韓国も同様でしたが国としてギャンブルを禁止しているのです。これは徴兵制・国防意識の一環なのでしょう。日本は齒がゆい程呑気ですね。

- この様な環境のなかで、華僑に象徴される漢民族の生活力、経済活動が、戦後台湾の経済を発展させて来ました。その実力を附録の統計表でご覧下さい。

現在の私たちは、「その基は日本統治時代の兎玉総督をはじめ、多くの先人の真摯な努力があるのだ」と言い度いが、これは後世の公平な眼で見て貰う外はありませんね。

この事について、最近贈られて読んだ「英国人記者ストークスの本(2013)」[※]の次の一説を紹介します。

日本が韓国を併合したのは、日露戦争の5年後(1910年)だった。日本は韓国を近代化するために膨大な労力と費用を投入した。日本の努力は大変なものだった。義務教育、大学教育、医療、警察制度、軍隊まで、今日の韓国社会の基礎をつくった。

イギリスの植民地支配と異なって、日本は自国の持ち出しで、韓国を建設するために投資をした。私の見解だが、韓国人は日本人の努力を受け入れた。日本の統治は欧米の植民地支配の様に、人種的な優越感によるものではなかった。朝鮮人も同じ国民として処遇した。

イギリスのインド統治と比較すると、インドでは白人が優越した。インド人に限らず、アジア人は劣等人間として扱われた。

イギリス統治では、植民地の人々に対する教育は否定され、まったく行われなかった。日本は台湾と朝鮮に、それぞれ帝国大学をつくった。イギリスの植民地には大学が一つもなかった。今でも、台湾、韓国では帝国大学の延長である台湾大学とソウル大学が最高教育機関となっている。

この引用文章は韓国を台湾との読み替えが許されると思います。

著者はジャーナル誌日本支局長として、1964年以来50年の東京住まいで、「我々以上に日本人」の感覚で、第三者としての正確な眼での記述ですね。

- 周女史の台湾近代史でも、何れ日本統治時代の功罪認識が扱われるでしょう。八田土木技師の事蹟に象徴される先人の献身的な真摯の努力の価値を見出して呉れる事を期待して良いと思います。

※参考図書

英国人記者が見た連合国戦勝史観の虚妄

ヘンリー・S・ストークス 2013.祥伝社

○あとがき

平成26年10月18日(土)、古川勝三さんにお会いする機会を得ました。古川さんは美術教師として高雄日本人学校に派遣された3年間(1980～83)に、現地での八田技師の事蹟を知って感動され、これを詳細に追跡して、広く世に問う活動を、現在も続けて居られます。10年前に高校校長を退職されてからは、修学旅行を通じての次世代への伝承に尽力され、丁度、仙台での修学旅行研修会の講師として来仙されたのでした。

台湾修学旅行セミナー

日時 平成26年10月18日(土) 13時30分～16時40分
会場 仙台東洋ビル 8階 会議室
主催 公益財団法人全国修学旅行研究協会
共催 台湾観光協会
協力 (株)近畿日本ツーリスト東北
(株)ユナイテッドツアーズ

講師紹介 古川 勝三(ふるかわ かつみ)氏

「宮本武之輔を偲び顕彰する会」副会長、「八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会」顧問
「八田與一」研究の第一人者(「台湾を愛した日本人」を自費出版し、八田氏の功績を世に紹介したことで知られる。例えば、司馬遼太郎氏が台湾紀行に引用し、李登輝氏(元台湾総統)が感懐して紹介したことで、台湾の教科書に取上げられ、TVドラマ化もされた)

プロフィール

1944年 愛媛県宇和島市生まれ
1967年 愛媛大学卒業、以降教職(美術)の道に進む
1980年 文部省海外派遣教師として、台湾省高雄日本人学校に3年間勤務
(八田與一の業績に感動し、現地日本人会機関誌に連載)
1989年 「台湾を愛した日本人」八田與一の生涯 出版
1991年 「台湾を愛した日本人」で土木学会著作賞受賞
1998年 愛媛県松山市立旭中学校長
2000年 愛媛県松山市立高浜中学校長
2001年 「臺南大堀之父」八田與一傳 中国語版を台湾で出版
2004年 退職
2009年 「台湾を愛した日本人」土木技師八田與一の生涯 改訂版を出版
2013年 台湾政府より「台湾観光光栄賞」を授与される
「日本人に知ってほしい『台湾の歴史』」を出版

会場でお目に掛かり、西国衆らしい熱血溢れる講演には打たれました。八田さんが、嘉南全域の60万人が等しく利益を享受できる様に、常に心を砕いて居られた様子を、実例を挙げて話されました。神様の由縁ですね。それも美術教師を離れて土木の専門分野まで、実際の施工当事者を探し出しての調査の結果ですから、土木を専門とする私でも、全く頭の下がる思いでした。今日の八田與一像は、全て古川さんのご努力の結晶なのでした。

ロータリアンの友人が、「八田さんの事を知らなかったのは日本人の恥だ」と慨嘆したのも宣なるかな。古川さんの話では、取材に来た若い新聞記者が感激し、記者を廃業して台湾の大学に入り直し、現在は名古屋で大学の先生だとか。

第4代児玉総督、第7代明石総督お2人とも病没の直前まで台湾現地で総督を務めて居られた様に、台湾には誰しもが惹かれ、入れ上げる要素がありますね。私もその一人です。

これと言うのも明治文明開化の先端を走り、然も現地の人々が素直にこれを受け止め、現在も承継されている。こんな処は世界を見廻しても希有な事でしょう。

詰まらぬ小理屈での世渡りが横行する現代社会にとって、一服の清涼剤を見る思いは、私だけではないでしょう。

大道を往く八田さんの行動。それを素直に受け止め伝承している義に篤い台湾現地の人々。この事例を真摯に受け止めて次世代の国際社会に活かす日本民族でありたい、と、心から念願します。

それにつけても、事蹟を此処まで詳細に調査を重ね、周知に尽力されている古川勝三さんに、あらためて敬意を表すと共に、文献の引用・転載を快諾して下さいました事に心から感謝します。

(平成26年10月20日)

